

## Ⅲ-4

## 「漕ぐ」

## —櫂とその身体技法—

洲澤 育範

## 1 櫂・paddle と 櫓・oar

舟を人力で推進させる道具として、櫂と櫓がある。この二つを明確に区別するのはむづかしい。一般的には櫂は川や湖で使い、櫓は海で使う推進具とされている。また船舶史においては、漕ぎ手が舟首を向き、手で支えて漕ぐ推進具を櫂、漕ぎ手が舟尾を向き、支持具で支えて漕ぐ推進具を櫓あるいは櫓かいとしている。

しかし表面積の7割が水圏であるこの地球には、人力で舟を推進させる数多の道具があり、それらを櫂と櫓の二つの言葉に納めきるには無理がある。

## 2 櫂

自班のセッションテーマは「フネとカラダフネの構造と漕法」とし、南西諸島のサバニ、青森のムダマハギ（車櫂についてはここでは触れない）、アムール河のオモロチカなどを事例にあげ討論された。よってこの水域とアラスカ近辺までの櫂について、簡潔に、その形と作りを説明してみよう。

持ち手部は丸もしくは楕円や卵形、あるいは角のとれた四角形の棒状の柄、その先に水をかく水刃\*がある。水刃が片側だけにある櫂の全長は一尋くらい。水刃が両側にある櫂の全長は一尋半から二尋くらいまで。柄の大きさは指二本から三本、長さは肩幅から半尋くらい。水刃の最大巾は手の指四本分から手のひら、あるいは親指から人差し指を広げたくらいで、その長さは半尋くらい。

また水刃の厚みは先端部で小指の指先くらいで、根元で指二本から三本くらいだ。以上は、平均的な方法であり、例外もある。

材は耐水性のたかい広葉樹、針葉樹を用いる。材取りは水刃の最大幅が手のひらくらいまでは柁目取り、手のひら以上は板目取りとする傾向がある。いずれも木目が通り、節のない材が好まれる。

漕ぎ手は舟首を向き、手で櫂を支えもち漕ぐ。漕ぎ方は前後左右に舟を推進させる漕法を基本とし、櫂での舵取り、舟が大きく傾いたときに櫂で復元（例・舟が左に大きく傾き転覆しそうになったとき、漕ぎ手は自分の体の左横の水面を櫂の水刃で押さえこみ、舟の傾きを右にもどす動作）する技術などがある。

推進、舵取り、舟の傾きの復元、この三つが櫂の使い方の主な技術といえる。

日本の諺に「櫂は三年、櫓は三月」というのがある。櫂を使いこなすには熟練が必要だということだろう。

\* 水刃という言葉について。

櫂の水をかく部位の名称だが、日本語には適当な語彙がない。英語ではそれを blade というが、直訳したのではない。伝統的な櫂の使い方は、水をつかまえて漕ぐ（抗力推進）というより、水をからませて

漕ぐ（揚力推進）感が強い。つまり櫂の水をかく部位を、水に刺し水を切りとるように漕ぐので「水刃」という言葉をあてはめた。

### 3 片刃の櫂・single blade paddle と双刃の櫂・double blade paddle

#### ○ 分布

2章で説明した櫂を大別すると、片刃と双刃の二種類になる。柄の片側に水刃があるか、両側に水刃があるかである。その分布を、南西諸島から日本本土、アムール河河口域からカムチャツカ、ベーリング海峡からアラスカにかけての範囲を中心にみてみよう。（以下、片刃櫂、双刃櫂と表記する）

南西諸島から本州において、筆者は双刃櫂の存在を知らない。北海道から北上する水域で双刃櫂が使われ、片刃櫂との混在がアラスカまでみられる。

さらにアラスカの極北地方から東に、カナダ〜グリーンランドのイヌイットは双刃櫂を多用し、アラスカをのぞく北米大陸のインディアンは片刃櫂を多用する傾向にある。また世界的にみると、片刃櫂の分布が圧倒的に多い。

#### ○ 片刃櫂と双刃櫂の性能の比較

筆者は両方の櫂を作り漕ぐ。その経験から、どちらが優れた道具だとはいえない。どちらにも長所があり短所がある。どのような自然環境で、どのような舟に乗り、何を目的に、何をするかにより、適切な道具が作られ、使われている。長い時を経た道具は、それ自体に優劣はつけがたく、それを選び使う人の知恵と技術が試される。

まず、水域でつかう道具を、陸からの視点だけで考察するには、いささか問題がある。水上を人力で移動するとき、目的地に向い真っすぐな道が現れることはきわめて稀である。なぜなら波やうねりや流れがあり、風が吹くからだ。往々にして水上に現れる道は、曲がりくねり、高低差がある。

海上であれば、舟底に着座した状態で4km程度さきの波やうねりは視覚でとらえられる。しかし流れは複雑で反転流もあれば上昇流もあり、まちかでなければ判断がつかないこともある。ましてや風はやっかいだ。川筋は風の道だ。湖は風のたまり場でもある。海上では陸地から離れると風を遮るものは一切ない。人力で水上を移動するとは、風とどう折り合いをつけ、どう和するかが、最大の重要事といえる。櫂という道具を考えると、水にたいし櫂がどう作用するかと同時に、風にたいして櫂がどう作用するかも考えなくてはならない。あわせて、舟がひっくり返ったときの、櫂の使い方もさまざまあるし、狩猟の場においては、水刃をつたい落ちる滴の音にも気をつけなくてはならないことを付け加えておく。

一見すると、左右交互に漕げる双刃櫂が、片刃櫂より便利とおもえるかもしれないが、使われる舟、漕ぎ方、状況により、どちらがより相応しい道具なのか、水域からの視点が大切である。

## 4 櫂と舟、そして舟の使用目的

#### ○ 片刃櫂

#### ◎ 舟との相性

おおよそ、どのような舟にも片刃櫂はもちいられる。舟を選ばない櫂といえる。その適応性の高さは、形状からくる漕ぎ方にある。片刃なので空中に出ている櫂の部分は漕ぎ手の頭付近より上にでることはない。

- ① 複数の漕ぎ手が接近して漕いでも、お互いの櫂・水刃がぶつかるのを防げる。
- ② アウトリガーの腕木や、帆を操る紐があっても、それをさけて、舟の片側だけを漕ぐことができる。

- ③ 容量が大きく舷側の高い舟でも、櫂を立てて漕ぐことができるので、漕ぎ手の腕や肘、脇が舷側にあたるのを防げる。
- ④ 舟巾の広い舟でも、片側だけ漕げばよいので、舟の前後中心線より舷側によって漕げる。
- ⑤ 片刃なので、掲げ手（柄の上部を持つ手）の握り方を順手、逆手、あるいは柄頭を握るなどして、水刃の水に対する角度を、微妙に調整できる。（くわしくは、オモロチカの例で後述する。）

◎ 舟の使用目的

主として漁撈と運搬。

○ 双刃櫂

◎ 舟との相性

こちらは舟を選ぶ。漕ぎ手の数は1人もしくは2人。特殊な例として3人。通常、漕ぎ手と乗り手の数は一致する。舟の容量は小さく、甲板の位置は水面からせいぜい30cm～40cm程度と低い。船体比は全長：全幅が10：1程度と細長く、アウトリガーや帆を持たない舟である。

例外はあるので、相対的にこのような舟だと捉えてほしい。

舟を選ぶ理由は、双刃なので左右が漕げる舟でなくてはならない。空中に出ている櫂・水刃が長いので、櫂を立てて漕ぐのはむづかしい。また風の影響を受けやすい。

- ① 左右を漕ぐので、舟巾が狭くなくてはならない。
- ② 左右を漕ぐので、つねに舟の前後中心線上にすわなくてはならない。
- ③ アウトリガーの腕木や、帆を操る紐はじゃまになる。
- ④ 容量が大きく舷側の高い舟では、漕ぎ手の肘や脇が舷側にあたり痛くて漕げない。また、波の状態によれば水刃が水に届かないこともある。
- ⑤ 舟巾の狭い舟では、櫂が長いので、アウトリガーの代わりとなり、櫂をつかい舟の左右のバランスはたやすくとれる。
- ⑥ 横風のとき、風上、風下を気にせず漕げる。

◎ 舟の使用目的

主として舟上からの狩猟。

こうして、片刃櫂と双刃櫂の舟との関係をみてくると、ただ舟を推進させるだけなら片刃櫂で十分であろう。ここで考えなくてはならないことは舟の使われ方である。片刃櫂が主流をしめる水域では、その舟は主として漁労と運搬に使われてきた。

しかし、双刃櫂が主流となる水域では、舟は主として海獣猟、あるいは河川を渡渉するカリブー猟に使われてきた。つまり、瞬時により機敏に舟を操作するには、双刃櫂のほうが扱いやすい。

片刃櫂と双刃櫂の分布、また用途を考えるうえで、舟の使用目的が漁撈なのか、狩猟なのかを考慮する必要がある。もちろんここでも例外はある。

## 5 「漕ぐ」身体技法

- 片刃櫂を使う漕ぎ手の下肢の状態は、正座、腰掛け、投げ足。  
(立ち漕ぎもあるが、ここでは取り上げない)
- 双刃櫂を使う漕ぎ手の下肢の状態は、投げ足。

「漕ぐ」動作を、漕いだことがない方がみると、腕の動きが目につき、腕で漕いでいるように思われ

る。しかし、実際は下肢、腹筋、背筋などの人体の大きな筋力を使い、その力をいかに効率よく、腕から櫂につたえるかが、漕ぐ動作である。

ここで取り上げる漕ぎ方は、競技などに勝つための近代パドリング理論ではなく、生きるために永々とくりかえす動作、エネルギー消費をできるかぎり抑さえて行う運動について考察する。

まず姿勢。それぞれの下肢の状態は上に記した。いずれの状態でも股関節がゆるみ、骨盤が起き、背筋<sup>せすじ</sup>は伸ばし力をぬき、顎はかるく引き、股関節から上の上体が緩やかにスムーズにねじれるようなもつ。あわせて下肢を、正座なら膝頭と足の指で、腰掛けなら踵とお尻で、投げ足なら足裏・踵とお尻・腰でやわらかく踏ん張る。そして下肢と上体が連動するように、体幹で上体をねじる。掲げた腕は押すより伸ばすように、舷側にある腕は引くよりたたむように動かす。体の重心は丹田から股間に置くように意識し、舟のバランスはお尻でとる。視線はできるかぎり目標物をとらえる。運動のはじまりは視線にある。

たとえば、舟のなかで日本の古武術のナンバ歩きをしながら、上体をねじる運動をくりかえし、腕から櫂へと力を伝える。

具体的に、投げ足で右側を漕ぐ動作を説明する。まず櫂の柄を肩幅くらいで順手にもち、胸の前で肘をかるくまげかまえる。右の腰を前に出すように意識し、右肩から上体を右前にねじり、右腕を軽く伸ばし、水刃の先端が右足の爪先あたりに入るように水に差し込む。右足をやわらかく踏みこみつつ、左腕をゆっくり前方に伸ばし、右腕の肘をたたみながら、上体を右後ろへねじる。この動作をくりかえす。

前方に進むとは、水刃をさし込んだところに、自分の腰がすいよせられるような感覚だ。

ここで説明したのは、「漕ぐ」きわめて基本的な身体技法である。舟のスピードを上げるなら櫂を立てて漕ぎ、舟の安定を優先するなら櫂を寝かせて漕ぐ。

## 6 片刃櫂の操り方／同班・赤羽正春氏の報告オモロチカの事例から

片刃櫂の柄を持つ上の方にある手・掲げ手の握り方の写真をご覧いただきたい。写真左より、順手、柄頭を握る、逆手である。下肢・上体の運動は同じでも、それぞれの持ち方で腕から櫂への運動線を変えることができ、舟の微妙な操作ができる。

このあたりの櫂の操り方が、近代パドリング理論（競技・レクリエーション）にはない、伝統的な暮らしや生業に結びつく身体技法といえるだろう。



写真1 順手



写真2 柄頭を握る



写真3 逆手

### 写真1 順手

舷側より外に開くように漕げ、とても荒れた水面で舟のバランスをとりながら漕ぐには塩梅がよい。水刃の表で舵をとりやすい。

### 写真2 柄頭を握る

櫂を立てて舷側のすぐ側を、舷側にそって漕ぎやすく、舟足を早く保つには塩梅がよい。水刃の表裏



どちらでも舵をとりやすい。

### 写真3 逆手

舷側より外に開くように漕げ、とても穏やかな水面で楽に漕ぐには塩梅がよい。水刃の裏で舵をとりやすい。

(例外もあるし、微妙な感覚なので塩梅がよいと表記した。)

## 7 特異な櫂、その形状／水刃の表と裏～柄と水刃の位置

先に記したとおり、ここで取り上げた水域は日本の南西諸島からアラスカ沿岸である。実はこの水域には他に例をみない、特異な櫂が存在する。

一般的な水刃には表裏の形状の差異、使い分けは無いのだが、沖縄のサバニで使う古い様式と思われる片刃櫂・ウェーク(図1)と、アリューシャン列島のウナンガン(アリユート)が使った双刃櫂・haasi-x(図2)の水刃には表裏がある。そして水刃の表面には際立った峰もある。

また通常、柄と水刃の断面の中心は同一線上にあるが、上記二種の櫂は柄の断面中心にたいし水刃断面の中心が、水刃裏寄り、つまり漕ぎ手から見ればわずか数センチだが、水刃の先が前方にオフセットされている。

### ◎ 水刃の峰

巾の狭い水刃に峰をつけることにより、水中での水刃の微妙なブレを押さえることができ、安定した水刃の運動線を描くことができる。

### ◎ 水刃の表裏

さらに水刃に表裏を設け、表側に際立った峰をつけることにより、抗力や揚力が増す。(水へのからみ、喰いつきが良くなる)

### ◎ 柄に対する水刃のオフセット

水上を前進するとは、漕ぎ手前方の水をいかに効率よく扱うかということだ。わずか数センチだが、何千回、何万回と繰り返す動作では、手首、肘、肩にかかる負担を軽減してくれる。

この二種の櫂は、他の櫂にくらべると海人の熟れた洗練を感じる。そこから見えてくることは、沖縄のウミンチュもアリューシャンのウナンガンも、外洋における操船術・航法術を、つきつめて昇華させようとした海人であったのではないだろうか。

(ムダマハギで使う車櫂も身体技法から見ると、非常に特徴的である。車櫂については、Ⅲ-3の昆政明氏の報告を参照されたい。)

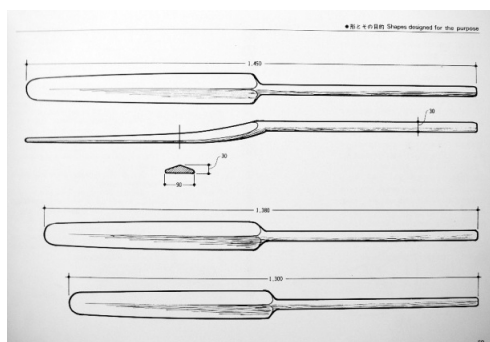


図1 ウェークの図

出典：白石勝彦著『サバニ』より

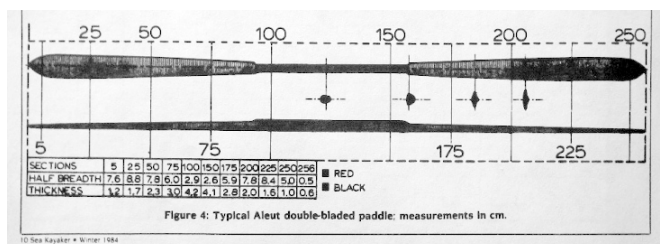


図2 ウナンガンの haasi-x の図

出典：『Sea Kayaker』誌 1984年発行より

## 8 結びとして

以上、作り手・漕ぎ手として櫂について考えてみた。ふだんは方言と海言葉で考え、話し、行動しているので、おもはゆい内容となったが、私が、櫂、舟、海と会話したことの報告書である。

### 参考文献

- 内田正洋 『シーカヤック教書』 海文堂出版 2009 年  
大内青琥 『おじいさんのはじめての航海』 理論社 2003 年  
大塚和義編 『北太平洋の先住民交易と工芸』 思文閣出版 2003 年  
後藤明 『海を渡ったモンゴロイド』 講談社 2003 年  
白石勝彦 『サバニ』 白石勝彦住空間設計室 1985 年  
出口晶子 『丸木舟』 法政大学出版局 2001 年  
門田修 『漂海民』 河出書房新社 1986 年  
Arima, E.Y. 1987. *Inuit Kayaks in Canada*. Canadian Museum of Civilization  
Arima, E.Y. 1991. *Contributions to Kayak Studies*. Canadian Museum of Civilization  
Fortescue, M. 1990. *Kalaallit Atuakkiaannit*. University of Alaska Press  
Horridge, A. 1987. *Outrigger Canoe of Bali and Madura, Indonesia*. Bishop Museum Press  
Ivanoff, J. 1999. *The Moken Boat*. White Lotus  
Jochelson, W. 1990. *Unangam Ungiikangin Kayux Tunusangin*. Alaska Native Language Center  
Kaplan, L.D. 1988. *Ugiuwanngmiut Quliapyuit*. University of Alaska Press  
Petersen, H.C. 1987. *Qajaq*. Atuakkiorfik

### 参考映像

- 『マダガスカルのカヌー』 制作販売・海工房 2009 年  
『沖縄の海』 制作販売・海工房 2006 年  
『老人と海』 制作販売・シグロ 1990 年  
『ムダマハギで海に出よう』 制作取扱・みちのく北方漁船博物館 2004 年  
Alaska Native Heritage Center. 2001. *Qayaqs and Canoes* 制作販売・Alaska Native Heritage Center  
Dalsheim, F. 1935. *The Wedding of Palo* 発売元・Video Yesteryear  
Flaherty, R.J. 1922. *Nanook of the North* 企画・制作・発売元 IVC  
Flaherty, R.J. 1934. *Man of Aran* 企画・制作・発売元 IVC  
Heath, J.D. 1986. *Qajaq Klubben* 制作販売・Heath, J.D. 現在入手不可  
Heath, J.D. 1989. *Greenlanders at Kodiak* 制作販売・Heath, J.D. 現在入手不可  
Kunuk, Z. 2001. *Atanarjuat: The Fast Runner* 販売・メディアファクトリー  
Zimmerly, D.W. 1986. *Qayaq* 制作・University of Alaska Press 現在入手不可